茅ヶ崎市立中島中学校

研究テーマ：「活用可能な学力を身に付けるために」　～グループワークの質的な向上をめざして～

１、実践の目的

本校では令和元年度より上記研究テーマに取り組んでいる。グループワークの有用性を生徒と教員が共に感じ、他者との関わり合いの中で学ぶことが重要であると考えた。

そこで、教科指導全体を通してグループワークの質を向上させることで、日々の教科指導に付加価値を生むとともに、生徒が主体的に学ぶ態度を教員が支援できるよう、授業では日常生活との関連を明確にし、生徒の未来へとつながる学習をめざして設定した。

２、実践の内容

（１）授業キャッチフレーズの設定

年度初めに全教員が自身の授業キャッチフレーズを設定し、授業で生徒から見える位置に提示した。授業キャッチフレーズは「失敗から何を学ぶ？」や「ENJOY EXERCISE」など、生徒に親しみやすく、授業者の意図が伝わるようなものに設定した。

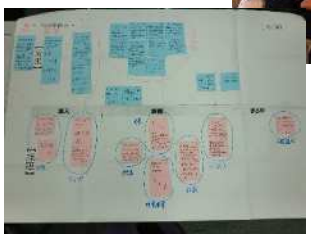
（２）「本時のめあて」および指導案における「～させる」表現の撤廃の統一化

授業では「めあて」という形ですべての授業で「本時の目標」を掲示することを徹底した。

また、生徒と教員が協力して授業を作り上げることを念頭に置き、指導案などでの「生徒に～させる」という表現を撤廃し、生徒の能動的な活動を支援するという立場の確立をめざした。

（３）校内授業研修会による授業力の向上

全教員が年度内で１度は指導案を作成し、グループ内で指導案検討を行い、公開授業を行った。その中で、研究テーマである「活用可能な学力を身につけるため」の授業展開や発問、グループワークの持ち方などについて議論し、より良い授業づくりに取り組んだ。



（４）生徒インタビュー

年３回の公開授業後、生徒インタビューを実施し、本時の授業について生徒の意見をすぐに授業者へフィードバックした。※下記３つの質問を中心に行った。

① どのような力が身に付いたと思うか

②グループワークの内容、やり方は効果的があったか

③授業内容は今後、どのような役に立つと思うか

（5）校内研修

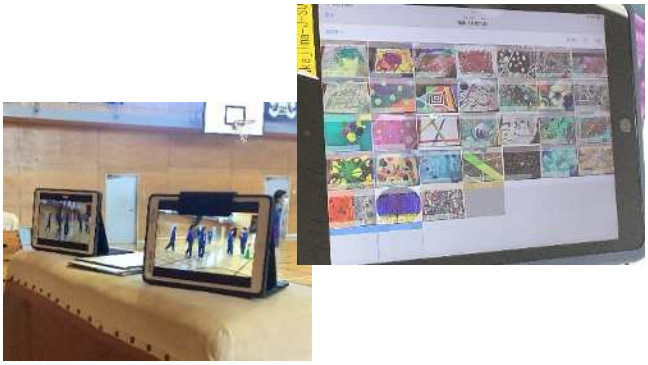
横浜国立大学教育学部教授　有元　典文氏の講義の中で、教員がグループワークに取り組む活動を行うことで、グループワークを行う意義や質の向上を実感し、授業実践へ生かした。

（6）授業アンケート

年１回（12 月頃）生徒を対象に「授業アンケート」を行い、教員の授業改善に生かすことに務めた。アンケート結果から『授業内で「活用可能な学力」（将来の生活に役立つ力）が身に付く場面が設定されている。』と感じている生徒の割合が学年が進むにつれて増えている。

（7）ICT を活用したグループワークの検証

新型コロナウィルス感染症の予防の観点から、対面でのグループワークを行うことが困難な状況が続いた。そこで、タブレット端末を活用したグループワークの取組を行い、その効果を検証した。



３、実践の成果

（1）生徒の変容

他者と意見を交わすことで考えを共有し、自身の中に新たな発想や考え方が生まれたと感じる生徒が多くいた。人前で話すことが苦手な生徒も、小グループであれば自身の考えを述べることができるようになってきた。

グループワークを通して学び合うことに楽しさを感じることは、「活用可能な学力」を身に付ける上で重要な要素だと考える。

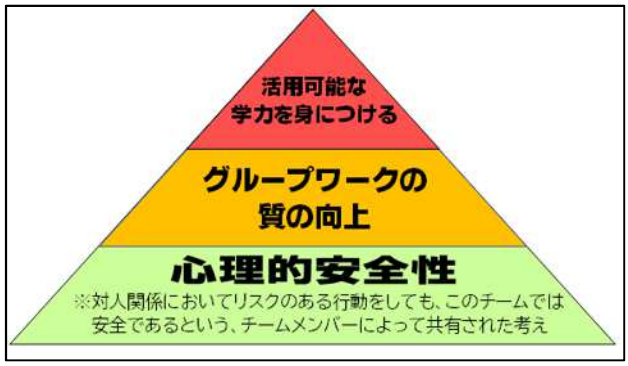
（2）心理的安全性の必要性

校内研修等を通して、グループワークをより活性化させるためには、その集団（グループや学級）での「心理的安全性」が重要であることに気が付いた。

この「心理的安全性」は教科指導だけではなく、学校生活のあらゆる場面でトレーニング（ディスカッションやレクリエーション）を行うことで構築されるものと考える。

４、今後の展開

生徒は間違えることを恐れると、積極的に発言できなくなる。グループワークを行う上で重要なことは「良いことを言う」ことではなく、「気負わず、ふつうにいろいろなことを言う」である。

そのためには、話し手よりも聞き手の存在が重要である。「活用可能な学力を身に付ける」上で、安心感のある集団内でグループワークを行うことで、その効果はより高まると考える。

今後はグループワークの質をより高めていけるように、心理的安全性が保障された集団づくりに、より一層取り組んでいきたい。